

「総勢 143 名が参加！過去にない盛り上がりだった懇親会」

昨年、築理会は 1971 年の設立以来 35 周年を迎えました。そして、2 部建築学科も創設 30 年となりました。また、東京理科大学も創立 125 周年を迎え、記念事業として神楽坂校舎を再編する計画が進んでいます。

まもなく我々の学んだ 7 号館、9 号館の取り壊しが始まる予定です。そこで昨年の築理会総会・懇親会は、35 周年記念大会としてメインテーマを「さよなら 7 号館、9 号館」とし、神楽坂校舎を見渡せる 1 号館 17 階の会議室で開催しました。塚本恒世理事長・竹内伸学長をお招きし、過去にない盛大な懇親会を開催するに至りました。



ご案内

東京理科大学工学部建築学科 I 部創設 45 年・II 部創設 31 年

築理会 総会・懇親会

「九段校舎で会いましょう」

東京理科大学創立 125 周年記念事業に伴い、昨年度から新九段校舎に建築学科が移りました。そこでの初めての総会・懇親会となります。新校舎の案内を含めてイベントも多彩に企画しております。皆様のご出席をお待ちしております。

なお、総会翌日に親睦ゴルフコンペを企画しておりますので、関心のある方は下記に御連絡下さい。

日 時： 平成 19 年 4 月 7 日（土）
 総 会：午後 3 時 ～
 懇親会：午後 4 時 ～ 6 時半
 会 場： 東京理科大学 九段校舎 5 階
 建築学科 K N -501 教室
 千代田区九段北 1-14-6
 （地下鉄東西線・半蔵門線・都営新宿線
 「九段下」①出口）

会 費： 5,000 円（当日）
 ＊ 3 月 20 日までに郵便振込みをされる場合は割引料金
 4,000 円です
 ＊郵便振込先
 名義「築理会」 口座番号 00110-5-171952

イベント概要：

＊卒業生の優秀作品の展示（含：築理会賞授賞作品）
 ＊新九段校舎の紹介
 ＊理科大出身歌手のライブ（予定：祥子）
 ＊懇親会終了後、同期会、研究室 OB 会をご予定下さい
 参加申込： 事務局宛に「氏名・卒年・連絡先」をメール又は Fax で連絡下さい。
 連絡先： 築理会事務局 teru@rs.kagu.tus.ac.jp
 Tel 03-3260-4272（内 6689） Fax 03-5213-0976
 親睦ゴルフ（問い合わせ先）：
 佐治（I 部 5 期）kousaji@ybb.ne.jp
 片淵（I 部 6 期）katabuchi@satokogyo.co.jp

懇親会に先立ち午後4時より総会が開催されました。三松一宇（I部1期）会長の挨拶から始まり、会則改定、決算報告、役員変更など決議



事項の説明があり、満場一致で採決となりました。

さて、待ちに待った懇親会が午後5時より開始されました。今回は35周年記念懇親会とのことで



「100名以上の参加者を集めよう！」とのキャッチフレーズで幹事一同が半年前より準備に邁進してきました。結果を最初にご報告します

と、参加者は予想を大きく上回り、会員118名（I部93名、II部25名）、来賓（教授、理事、同伴者）19名、学生・院生6名。総勢143名となりました。

開会の挨拶、乾杯と続き、来賓の挨拶では、塚本桓世理事長・竹内伸学長、学科OBの先生方からご挨拶を頂きました。懇親会は、最初から大いに盛り上がり、宴が進むに連れて、あちこちで懐かしいグループが思い出話を語り合っていました。



用意していたアルコールも途中で無くなり、急遽買い出し部隊が出動するなど、嬉しい悲鳴の中、午後7時に中締めとなりました。詳しい様子は築理会ホームページに掲載されていますので

ご興味ある方は是非ご覧下さい。

<http://www.chikurikai.org/>

4月7日に行われる今年の総会・懇親会の開催案内も掲載されています。

(天神良久 I部 82年卒)

Special cross talk

活躍するOBたち、次々に注目賞を受賞

建築や住宅の分野で、築理会OBたちの活躍が目につきます。昨年、建築賞を受賞したり、注目のコンペを射止めたりした4人のOB、薩田英男氏（工学部I部13期）、広谷純弘氏（工学部I部15期）、細矢仁氏（工学部I部28期）、菊地宏氏（工学部I部31期）に集まっていたいただき、話を聞きました。（以下敬称略）



——今日は4人にお集まりいただきました。勢いのある方々の話を聞いて、元気を出そうということで。まず広谷さん。富山の福沢地区コミュニティセンターが法隆寺宝物館などと並んで、公共建築協会の公共建築賞優秀賞を受賞されました。

広谷：竣工後3年以上を経過した建物を国土交通大臣が表彰する賞で、最近では建物が出来るまでのストーリーや必然性を問われるようになってきて、取りにくくなっています（笑）。地元自治体からの要請もあり、狙って出しました。

建設地の富山市大山エリアは、面積の93%が森林からなる「森のまち」。それを生かした活動をしよというので、2003年から毎年「LIVING ART IN OHYAMA」として地元を巻き込みイベントを行ってきました。コミュニティセンターは「地域の人々の大きな家」というコンセプトで、メンテナンスも地域の人々によって行われています。また、この建物をきっかけに、サイン・バス停・ベンチなど木を生かしたデザインで整備する「木と出会えるまちづくり」が始まりました。そのあたりも含めて評価してくれたようです。

——薩田さんは2004年に完成した集合住宅「keyaki house」が、2006年に東京建築賞の共同住宅部門で最優秀賞を受賞されました。これは東京都建築士事務所

協会が主催するものですね。

薩田：最初は「Gマーク」なら行けるのではないかとと言われて応募したのですがそちらはダメで、結果的にこちらで評価されました。応募は12件だったので、ねらい目だと思います（笑）。

敷地にはバウハウス出身の建築家、山脇巖氏が50年前に設計した和風モダンの住宅と離れ、そしてケヤキを含む庭園がありました。これらを生かし、旧邸宅の歴史を共有できる集合住宅として生まれ変わらせたものです。4人兄弟が持っていた土地で、思い出の土地を残したいという話でしたので。

左官のテクスチャーをいかに高層の建物に塗れるかにも挑みました。ベネチアなどのヨーロッパの古い街は、ものが朽ちていく美しさがある。日本の集合住宅でもそんなことができないかと考えました。

——細矢さんは沖縄小児保健センターのプロポーザルコンペを2006年3月に射止めました。沖縄県小児保健協会が協会設立35周年に向けてセンターをつくらうというプロジェクトです。

細矢：妹島事務所で一緒に仕事をしていた船木幸子さんと一緒に応募しました。臨時的診察や食育に取り組むセンターで、那覇市の隣の南風原（はえぼる）町に計画しています。コンペには16者が参加して、4者が二次選考に残りました。

主体は診療より児童館のでっかい版+ホールと

いう建物です。ワークショップ方式で煮詰めていくだろうから、できるだけ緩い形でコンペ案をつくりました。あらかじめ決められたプログラムにこだわらず、話し合いながら、緩いプログラムで決めていく提案です。1Fをポンッと浮かせて、そこに入れてしまうというような。

後で聞くと、まだつくりたいもののコンセンサスが出来上がっていない状態で、皆で話し合いながらつくり込める相手を選んだということでした。一時選考が終わり、4チームのヒアリングのときには、いけるかなあと思いました。

コンペが決まってから沖縄を訪れた際に、発注者の担当から「ちょっと別のところへ連れていきます。まずは見てもらいたいものがあります」と言われて。実はコンペを受賞した後に敷地が変更になり、そこに連れていかれました。今、新しい敷地で、コンセプトを生かしながらどうつくるか、やりとりをしています。

沖縄は「くちゃ」と呼ばれる独特の石灰岩の地質で、普段はN値が50くらいあるのだけれど、水を含むと文字通りぐちゃぐちゃになる。そんな驚きもありました。

——菊地さんは理科大の建築学科で常勤の助手をしています。住宅をリノベーションした「松原ハウス」が建築士会住宅建築賞の奨励賞を取りました。

菊地：築40年の木造で、住んでいたおじいさんの娘さんが、資産運用で使えないかという話でした。木造でしっかりした図面もないから、これは壊しながら考えていくしかないだろうと、その場で臨機応変に思いついたことを実践していきました。工務店とのジャズセッションみたいな感じですね。

予算は1000万円。補強できるところは補強して、工期2カ月、実際の工事は1カ月くらいのスケジュールでした。学生時代から光の研究をしていたので、光を入れる場所は明確にしようと意識しました。

対話しながら進めていくようなりノベーションで、可変性の高い木造の良さを再認識しました。

2005年の8月末に竣工し、建築士会の住宅建築賞で「大規模な改装もあり」と書いてあったので応募。写真も自分で撮りました。光のコンディションなどに



広谷純弘氏（写真左）：1980年卒、鈴木研。アーキヴィジョン広谷スタジオ代表。薩田英男氏（写真右）：1978年卒、真鍋研。1990年に独立して16年になる。薩田建築スタジオ代表

も思い入れがあるので。

——受賞してから変わったことはありますか？

広谷：賞状を意図的にコミュニティセンターの目立つ場所に飾ってあります。木造はどうしても時間とともに風化する。板の張り替えや塗装などのメンテナンスが必要になる。受賞は、関係者を含め、そういったことに対して手間をかけてきた証なのだと言って、盛り上げています。

実際に建てた後のさまざまな取り組みが認められたからの受賞で、そういったことが求められる世の中になりつつあるのだと思います。

薩田：人と建築が近づいてきているのではないかなという実感があります。人が建築に近づくには、そこで「働く」しかない。例えば男が家にかかわる。公民館でも手を入れながら付き合っていく。価値観がだいぶ変わってきているのではないですかね。

菊地：建築の授業で、つくる行為や生産過程を学びにくいのは問題だと思っています。つくることで身に付くこと、失敗することでわかることもありますから。時代もゆっくりになってきている…。

細矢：ものづくりや料理、道具、カンナ仕事などが男の仕事として見直されつつある実感はありますね。特に都市部では、男が働きに出てしまって、ものづくりの連続性が断裂してしまった。沖縄で仕事をするようになって改めて感じたのは、昔のよさが残っているんです。ものとのつながりとか。

薩田：左官は学校教育でも社会でも教えられない。左官は設計者の謀りごとが通用しないんです。学校ではそれを教えられない。ハプニングを楽しめない。私は「アバウト・ランダム・ノープロブレム」と言っているのですが、学校教育でも手の延長であり、身体性を生かせることができればいいなあと思います。



細矢仁氏（写真左）1995年修士修了。妹島和世建築設計事務所入所。2000年退社。2003年に独立。菊地宏氏（写真右）：1998年修士修了。ヘルツォーク・ド・ムーロン事務所を経て東京理科大建築学科助手

広谷：「LIVING ART」では、ボランティアで芸術系大学の学生と共に理科大の学生も参加してコラボレーションをしてもらっています。建築学科では、図面が最終成果物ですが、他校では自分の手で制作した作品が最終形です。この辺りは良い刺激になっているようですね。ただ図面を描くのではなくて、つくる過程をイメージできることが大切だと思う。

——コンペや賞を取るコツみたいなものはあるんですかね。

広谷：実は細かなことですが、例えば審査用の図面を何度も打ち出して、何度もコピーを取るか。審査はコピーで行われることもあるので、しっかり読めるか、図が切れないか、見栄えはどうかを確認します。

菊地：プレゼンの仕方也有很多ありますね。例えばヘルツォークは徹底的にほかの案をつぶすやり方でした。ほかの提案がいかにダメかということガンガンとプレゼンする。

——コンペだけでなく応用できそうですね。いずれにせよ、ものづくりに回帰するような姿勢で仕事をしている方々の元気がいいのはおもしろいですね。大きな流れがそちらに向かっているのかもしれないね。

不定期連載 現場へGO！（第6回）

理科大OBが施工管理に携わる現場を訪問するこの企画。品川駅コスモプラン工事を訪ねた。電車の往來する駅の線路上空工事に挑むのは1部29期(1994年卒)の猪俣直久氏

「エキナカビジネス推進事業品川駅コスモプラン工事」

新幹線の停車駅になり、高層ビルが立ち並び、今や品川駅はJRの中でも重要な位置を占める。駅周辺は再開発が



品川駅コスモプランを担当の猪俣氏。
猪俣氏のメールアドレスは naohisa-inomata@tekken.co.jp

進み、将来の発展を期待されている。その品川駅でより質の高い商品、サービスを提供することでJR東日本グループが新たな顧客価値を創造し、長期的に大きく発展することを目指して計画されたのがエキナカビジネス推進事業品川駅コスモプラン。

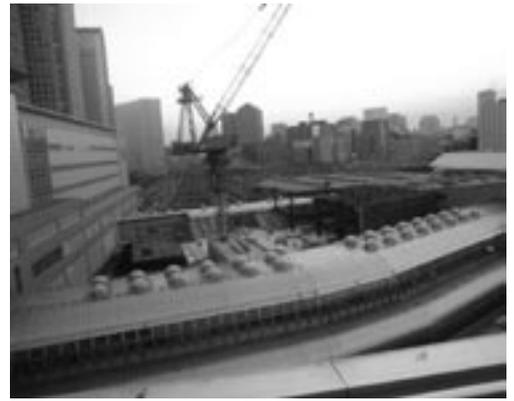
事業内容は鉄骨造3階建て延べ床面積4400㎡の商業施設。1、2階は商業空間。3階は商業施設バックヤードと駅施設だ。さらに、乗り換え跨線橋の改良工事。既存半円屋根を1段折り上げ、高天井にすることで、快適な大空間を実現している。そのほか、イベント広場、チップ制トイレの改修工事。設計はJRE設計とリックデザインが担当。施工者は鉄建建設。猪俣氏はここで作業主任として存分に腕を振るっている。

彼は鉄建建設に入社して13年目。在学中は松崎研でRC梁やハーフPCの研究に没頭し、年間100体ぐらいの破壊検査をしたとあって笑顔を見せる。研究所に



外観——線路上空に建設される駅施設完成予想図

入所するのが希望だったが、鉄建建設入社後はマンションの施工、駅ビルの改修などに携わっている。JRの工事が多い。最近



施工は終電から始発までの4時間

は仕事が忙しくて趣味のブラックバス釣りやゴルフに思うように行けないと話す。仕事にやりがいを見出す幸せな時期にいるのだろうか。

この工事が一般の工事と最も異なるのは施工時間に制限があることだ。線路上空の工事なので、終電から始発までの4時間が施工のできる時間帯だ。このため、施工では他にない苦労があると話す。杭打ち工事でも普通1ヶ月で完了できるのが6ヶ月に及んでいる。杭打ち期間中は毎日、杭打ち機を現場に搬入、搬出を繰り返す。他にはあまりない施工条件だ。さらにJRには施工上のルールがしっかりと決められており、それを守って施工に取り組まなければならない。毎日、電車がひっきりなしに走り、大勢の乗降客がいる中での工事だ。ちょっとした不注意が重大事故につながりかねない。また、現場内をはしる埋設ケーブルや配管が生きており、それに支障のないようにしなければならない。電線には3300Vの高圧電流が流れている。猪俣氏は「みえる化運動」を現場で実施して、安全確保のため職人に対しても気配りを怠らない。

猪俣氏がこの工事に最も力点を置いたのは施工とデザインの調和だと話に熱がはいる。新たな試みが随所にある。カーテンウォールと石のゲートの調整には気をつかった。図面でシミュレーションを繰り返して納得のいったところで施工に取り掛かった。

JRの駅舎工事は施工上の制約が多く、経験が必要だが、これからも困難を克服して取り組んで行きたいと心の内を語ってくれた。

(石神一郎=会報委員会)



品川駅新幹線乗り換え跨線橋、連日大勢の乗降客が

照明展 2006

照明展とは、あるテーマに関する照明を学生が自主制作・展示するもので、今年のテーマは"素"です。本展は、モノづくりに対する意識・意欲の向上と新たな人と人との繋がりを目的に2005年度理大祭より開催され、2006年度理大祭では作品40点、来場者は200名を数えました。また来場者投票により大学院2年北川剛司さん(山名研)の作品が一位に選ばれました。今後はコンペなどの形式も視野に入れながら本展のますますの発展の為活動して参ります。

照明展 2006 企画・運営 gyoza-crafts
 [代表] 坂巻 直哉(伊藤研究室)
 吉川 和博(山名研究室)
 間瀬 陽介(大月研究室)



卒業制作の集大成「りぼん」創刊

昨年の11月24日に「りぼん」創刊記念パーティーを建築科学生主催で、築理会有志を招待して、九段校舎で開催した。「りぼん」とは昨年度59名の学生が卒業制作を行ったが、それを本の形でまとめたものだ。掲載された作品はいずれも個性の溢れた、制作した学生の意欲と熱意が感じられるものに仕上がっている。この本の発刊にあたって築理会有志からも資金を集め、それを援助している。何事も初めてのことを成すには努力と達成意欲が必要だが、「りぼん」制作委員会の学生諸君には敬意を表したい。なお、「りぼん」は4月7日の築理会総会でも販売の予定。



皆さん、「りぼん」が継続発刊されることを期待しています



築理会有志と建築科学生の和気あいあいとしたパーティー

活躍するOB

活躍する卒業生を紹介するこのコーナー。今回は、法務省法務大臣官房営繕課を退官後、理科大再開発プロジェクトで建築顧問として活躍する石神一郎さん（1部5期）にお話を聞いた。

法務省関連施設の設計に従事

1970年卒業の石神さんは、2006年3月に法務省を定年退職したばかり。長年、施設設計に携わった経験を生かして、現在は理科大の建築顧問として再開発プロジェクトに携わっている。



石神さんの法務省での仕事は、法務省関係施設の企画、設計だった。一口に法務省関係施設と言っても、刑務所や拘留所、検察庁、少年院など幅広い。退官前の十年は、最高責任者として営繕課課長を務めていた。設計に携わる者であれば誰もが一度は目にしたことのある「建築設計資料集成」（発行：丸善）では、刑務所の項を担当した。

内部をうかがい知る機会の少ないこうした施設の設計に携わった石神さんの経験は、非常に興味深い。「例えば、少年院であれば、先生と生徒たち、そして生徒たち同士が良い関係を築くことのできる施設づくりが大切です。居室や教室として相手との関係がきちんと築ける空間は、中の人数がだいたい20人くらいまでです。この人数を基準に空間を考えます。当然、社会防衛のためにも逃走防止が必要になります。ただし、これだけではだめ。一番大切なのは、更生させて社会に返すことです。立ち直らせないと意味がない。そのため環境が必要になるのです」と石神さんは話す。

設計の標準は、ありそうでないのだという。刑務所にしても、1000人や1500人といった大人数を抱えているので、一つの町をつくるようなものだ。特殊な機能を果たしつつ、それぞれの「入居者」にとって「快適」な空間をつくらなければならない。「極限の状況にある人間と対峙するという意味では特殊ですが、根本的には住宅と一緒です。受刑者に厳しい生活をさせるための施設ではない。求められる機能を確保しながら同時に、人間的な環境を確保するのです。自分だったらどうすごしたいか考えて設計に携わっていました」。

建築顧問として経験を生かす

2006年6月からは、理科大の建築顧問として再開発プロジェクトに携わっている。理科大再構築委員会に週1回出席して第三者的な視点で意見を交わす。国の施設担当者として一般競争入札などに関わってきた石神さんは、契約や法規にも精通している。行政と調整

しながら狭い敷地の中で高密度の超高層キャンパスを計画中の理科大にとって、心強いアドバイザーだ。

さらに、周辺住民との関係づくりについてもこれまでの経験を生かしてアドバイスをしている。「刑務所などの建設は、ともすれば周辺住民から反対されることもある。施設内部の人のための環境づくりと同時に、周辺の住民に対する環境づくりも重要だった。新キャンパスも町と共につくるという視点が大切です。誠意を持って周辺の方々の意向を取り入れたキャンパスをつくるお手伝いをしています」と話す。

力強いOBの助けもあり、新キャンパスは誕生に向けて着々と計画が進んでいる。

■工学部第二部開設

30周年記念講演会・祝賀会を開催

東京理科大学が創立125周年を迎えた今年、工学部第二部の開設30周年の年でもあります。これを記念する講演会と祝賀会が2006年11月11日、学内外から約250名の皆様のご出席をいただき、ホテルグランドパレスにおいて盛大に行われました。

増井典明・工学部第二部学部長の開会のあいさつに続き、竹内伸・学長及び塚本恒世・理事長があいさつし、「工学部第二部は、東京理科大学の伝統である実力主義を堅持して教育・研究を行い、これまでに4000人余の卒業生を高度専門技術者として輩出し、わが国の産業界に貢献してきた。関係の教職員に対して深く敬意を表し、開設30周年を共に祝いたい」と述べました。

記念講演会においては、沖塩莊一郎・名誉教授（元工学部第二部学部長、建築学科教授）及び杉田利男・名誉教授（元工学部第二部学部長、電気工学科教授）のお二人が、同学部の開設期のエピソードや各専門分野における最新の話題などを紹介しました。

工学部第二部公式ホームページ：

http://www.tus.ac.jp/fac/ko2_index.html

同学部オリジナルホームページ：

<http://www.rs.kagu.tus.ac.jp/kougaku2/>



講演する沖塩名譽教授

撮影雑感

組写真「記憶：理大神楽坂2006～変わりゆく街並み」
川村賢一（1部6期）

英国王立写真協会正会員

昨年のはじめ、築理会を盛り上げたいので、写真展示できないかと相談を受けた。そこでチベット建築写真の大岩さんと私が、「さよなら7号館、9号館」というテーマで、我々にとっての原風景を記録として残し、懇親会で展示することになった。室内の撮影は、助手の大岩さんにお任せし、私は、外部空間と街並みを撮ることにした。

話があった直後、東京は大雪となり、大粒の雪が降りしきる中、最初の撮影に臨んだ。降りしきる雪に霞んだまちの風景は、幻想的で、車のライトだけが妙に輝いて見えた。

次の撮影は、桜の季節に合わせたが、想定外の人通りと車の多さで大苦戦。さらに、建物の方位を読み違えており、現地入りしたとき、すでに逆光で、正面の桜も日陰でほぼ色を失いかけていた。校舎は、ほぼ真東を向いていることが分かり、早朝にねらいを定め、4月末から5月はじめにかけて、本格的に撮り始める。

ところが去年は、天気の方が恵まれず、やきもきしながら、天気予報をチェックする日々が続いた。ここぞと思って朝4時起きし、タクシーとJRの始発で飯田橋へ向かったが、その日は天気予報が外れ、全く太陽は拝めなかった。

約1週間後、ようやく天気が回復し、始発電車で再挑戦。その日の朝日は、ようやく求めていたイメージ通りのすばらしいもので、まちは神々のドラマを見るようなまばゆい光に包まれた。狙っていた位置に三脚を構え、光が地面に到達するのを待つ。朝の6時、チャンス到来。夢中でシャッターを切りはじめ、確かな手応えを感じた。

当初は、実際に現場で建物に向かってみると、あまりにも写欲をそそらない被写体なので、どうしたものかと悩んでしまった。また、構内道路では、荷さばきのトラックに撮影を



平成19年会費納入のお願い

現在、平成19年度の会費の納入をお願いしております。同封の振込用紙にて、お振り込み下さい。

今後のさらなる築理会発展のため、多くの方のご協力をお願いします。

年会費 3,500円
加入者名 築理会
口座番号 郵便局 00110-5-171952



阻まれ、1時間待っているうちに光が変わってしまったこともしばしば。また、35mm判では、ツァイスのレンズといえども、大岩さんの中判のハッセルブラッドと比べれば、どうしても画質的に不利。そこで小型カメラの機動性を活かし、テーマも「記憶：変わる街並み」として、様々なまちの表情を撮ることにした。

結果として、日の出直後から午前、午後、夕景から夜景まで、冬から新緑の季節までを記録することができた。

展示方法などについては、懇親会当日朝現場入りするまでは、何かと気がもめたが、お陰様で会場準備もうまくいき、昨年個展で発表した「森呼吸」の写真の一部とともに、皆様に見て頂くことができた。

こうした機会を与えてくれたことへの感謝の気持ちとともに、ノルマを果たし正直ホッとしている。

「編集後記」

今年は建築学科が新九段校舎に移って初めての総会・懇親会。ちょうど九段の桜に合わせて4月7日の開催です。はらりと桜が散るなかで、同窓との旧交を温める。新九段校舎の紹介や祥子さんのライブと楽しみもいろいろ。ぜひ足をお運びください。なお、2006年は本来、二度発行予定だった会報を一度しかお届けできなかったことをお詫びいたします。
(安達 功 adachi@nikkeibp.co.jp)

築理会報 2007 春号

2007年3月発行 Vol.39

発行所 : 東京都新宿区神楽坂1-3

東京理科大学工学部I・II部建築学科
築理会事務局 03-3260-4271 (内6689)
03-5213-0976 (FAX)

編集長 : 安達 功

編集委員 : 石神一郎、広谷純弘、森清、伊藤学、渋川克也、
山名善之、平賀一浩、菊地宏、東有紀

印刷発送 : グローバルシステム株式会社